

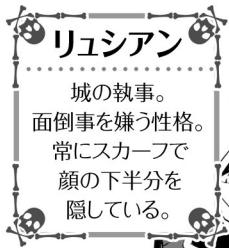


# 私がアンデッド城で コックになった理由 1

山石コウ  
Kou Yamaishi

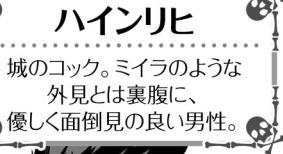


レジーナ文庫



リュシアン

城の執事。  
面倒事を嫌う性格。  
常にスカーフで  
顔の下半分を  
隠している。



ハインリヒ

城のコック。ミイラのような  
外見とは裏腹に、  
優しく面倒見の良い男性。



レインフォード  
伯爵

不気味な客人。  
辺境伯との間に、  
ただならぬ因縁が  
あるようだ——？



サリー

城のメイド。  
明るく親切な少女だが、  
怒ると恐いらしい。

## 登場人物 紹介



小川結  
ゆい

18歳の女子高生。スーパーからの  
帰り道、異世界にトリップした。  
小料理屋を営んでいた祖母の影響で、  
料理を作るのも食べるのも大好き。

エルドレア辺境伯

美貌の城主。  
アンデッド(不死者)だけが  
住まう辺境の地を治めている。  
食に対して凄まじい  
執念を持ち、隙あらば結を  
食べようとしている。

## 目次

私がアンダツド城でコツクになつた理由1

書き下ろし番外編  
移り香

私がアンデツド城でコツクになつた理由  
1

## 食材 × 賞罪

1

窓の外は夜の闇で真っ黒に塗りつぶされている。夜空に目を凝らすと、透き通った人の影がすうっと横切るのが見えた。それはレイスと呼ばれる死靈で、夜は彼ら——死者の時間だ。

「腹が空いた」

背後から突然声をかけられ、私——小川結は驚いて振り返る。すると、そこには男が立っていた。

彼は時代錯誤な礼装を身にまとい、長い赤毛を指先に絡めながら、私の部屋の扉にもたれかかっている。

いつからそこにいたのだろう。声をかけられるまで、まつたく気配を感じなかつた。

見る者を虜にするほど美しい彼の顔に、うつすらと笑みが浮かんでいるのを見て、私は嫌な予感がした。

「腹が空いてしまつたよユイ。何か食べさせてくれ」

物憂げに告げられた一言に、私の心臓が大きく跳ねた。今の私にとって、それは何よりも不吉な言葉だ。細かく震えだした手をぎゅっと握つて、恐怖心を抑え込む。

「失礼ですが閣下、お食事なら、つい先ほど召し上がつたはずでは?」

私が努めて冷静に尋ねると、男は笑みを深めた。

「たつたあれだけの量では、満腹には程遠い」

五人前の食事を平らげたばかりだというのに、彼はそう言う。健啖家を通り越して、

化け物級の胃袋の持ち主だ。私は読んでいた本を閉じて立ち上がつた。

「では何かお作りします。食べたいものはありますか?」

「お前がいい」

まっすぐに私を見つめる男の目には、言いようのない熱がこもつている。

「いつも言っているだろう、私が一番食べたいものはお前だと」

情熱的な愛の告白にも聞こえるが、それにロマンスを感じるほど私は能天氣ではない。そう、これは比喩でもなんでもなく——彼は文字どおり私を食らいたいのだ。

\* \* \*

私がこの城にやつてきたのは、数日前のことだつた。

その日はスーパーのポイントが二倍になる日だったので、私は調味料や食材を買い溜めするつもりで、特大の買い物バッグを手に張り切つて出かけた。  
「味噌と醤油、それにケチャップとドレッシングも買っておかないとね。あ、かつお節が半額になつてる！ これはお買い得」

店内を歩いていると、買い物籠の中はあつという間にいっぱいになつてしまつた。レジの前の長い行列に並び、会計を済ませた私はスーパーをあとにした。

ずつしりと重たい買い物バッグを持ち、達成感に浸りながら帰り道を歩く。

そのとき突然、目の前が真つ暗になつた。立つていられないほどの強い眩暈を感じて、その場にしゃがみ込む。

買い物に夢中になりすぎて、貧血を起こしてしまつたのだろうか？  
少ししてから、どうにか立ち上がつた私は、目を丸くした。辺りの景色がまるで変わつていたからだ。

見慣れた近所の町並みは消え、右を見ても左を見ても左を見ても黄金色の麦畑が広がつていた。

空を見上げれば、どんよりとした厚い雲に覆われている。  
おかしい。今日は朝から天気がよかつたはずなのに……。私は急に不安になつた。

どことなく懐かしさを覚える長閑な風景ではあつたけれど、こんなただつ広い場所に一人で立つていると、なんとも寂しい気持ちになつてくる。まるで、この世に私しか存在していないみたいだ。

とても混乱していたものの、とりあえず歩くことにした。何がどうなつているのかさつぱりわからないが、ここに立つていてもいいことはなさそうだ。  
まず誰かに会つて、ここがどこなのかを聞こう。そして帰り道を教えてもらうのだ。  
しかし、行けども行けども人の姿は見えない。視界に入つてくるのは、風に揺れて金色の波のように見える麦の穂ばかりだった。

やがてようやく景色が変わり、毛の長い大型動物の牧場が見えてきたころ、後ろから轟音が近づいてきた。

何事かと思つて振り返ると、一台の馬車が土煙を上げ、ものすごい速さでこちらに向かつてくる。私は慌てて横に飛び退いたが、勢い余つて転んでしまつた。  
二頭立ての馬車は、目の前を通り過ぎてから、ピタリと停止した。立ちのぼる土煙に

少しむせながら、私は馬車に目を向ける。

それはどう見ても普通の馬車ではなかつた。なぜなら、馬車を牽いている二頭の馬には首がついていないのだ。それどころか、真っ黒い外套がいとうを着た御者ぎょしゃにも首がない。

何これ……。幽靈？ それともロボット？

呆然としている私の前で馬車の扉が開き、中からフロックコート姿の男が出てきた。

私は固まつたまま男を見上げる。

「危なかつたな。もう少しでお前を轡ひき殺してしまうところだつた」

きちりとした礼服に、腰まで届く長い髪。その髪は熟なまれたトマトみたいに真っ赤な色をしている。

私はまた眩暈めまいを起こしそうになつた。

一瞬で見知らぬ場所に移動してしまつた上に、首のない馬が牽く馬車から出てきたのは、礼服を着た赤毛の男。

こんなことあり得ない。絶対に現実のはずがない。

男は混乱している私の手を引っ張つて立たせ、土埃づちほこりにまみれた私の服をポンポンと叩き始めた。力が強くて、かなり痛い。

「こんな時間に何をしていた」

「あの、道に、迷つてしまつて——」

「日が高い時間に外出するなど自殺行為だぞ。私の馬車に乗りなさい。家まで送つていこう」

その有無を言わさぬ口調に、私は戸惑つた。家に送つてもらえるのはありがたいが、この男についていつても大丈夫なのだろうか。思わず手にしていた買い物バッグをギュッと胸に抱く。

男は動こうとしない私に業ごうを煮やしたのか、無理やり馬車へ押し込む。私たちが乗り込んだ直後、御者席から鞭むちのしなる音と、聞こえるはずのない馬のいななきが聞こえた。そして馬車はゆっくりと動きだす。

私の向かいに座つた赤毛の男は、次々と質問してきた。

「肌は爛だられていないか？ 痛むところは？ なぜこんな時間に外へ出た？」

男の質問の意味がさっぱりわからない。肌が爛れるとは、一体どういうことだろう？ 馬車の中は妙に暗く、目を凝らしても男の顔はよく見えない。

「……言いたくないか。では名前は？」

「小川結です」

知らない人に個人情報を教えるのはどうかと思つたけれど、家に帰るために目の前

の男の協力を得るしかない。

「……珍しい名前だな。それに、こんな子どもが城下に住んでいたとは知らなかつた」「私はもう十八歳です。子どもじゃありません」

私の言葉を聞いて、男はあからさまに驚いた様子を見せた。私は高校三年生なのに、そんなに幼く見えるのだろうか。少し不愉快に思つたが、それ以上反論できずに黙り込む。男は柔らかなクッションに預けていた体を起こして、私の顔を覗き込んだ。すると、私からも彼の顔がよく見えるようになる。

そこで私は初めて気づいた。この男が、とても綺麗だということに。

燃えるような赤毛の奥から覗く、琥珀色の瞳。高い鼻梁。けれど、肌は病的と言えるほど青白く、血管が透けて見える。

美しすぎて逆に怖い。まるでよくできた蝶人形みたいで、人間らしさが感じられない。私は慌てて目を逸らした。けれど、男は血の氣のない手で私の首を掴み、視線を自分のほうに戻させる。

「温かい。……もしや呼吸をしているのか？」

激しく上下する私の胸を見て、男が感嘆の息を吐き出した。

「肌の下に生きた血が通つている……。なんということだ、お前は……人間か！」

男は私の首を掴んだまま笑つた。今まで氣品さえ漂わせていた美貌が下品に崩れる。男の口元がだらしなく緩み、薄い唇から涎が一筋垂れて、馬車の床に落ちた。

「まさか、たつた一人で我が領地に入つてくる愚か者がいるとは思わなかつた」

「あなたの……領地？」

聞き慣れない単語が出てきたことに、私はさらに恐怖を感じた。ここが日本であるならば、領地などという言葉はまず出てこないはずだ。私は一体、どこへ迷い込んでしまつたのだろう。

「何が目的でやってきた？　自殺志願者か？」

男の探るような視線を受けて、私は身を竦ませる。男の言つてることは相変わらず理解できなかつたが、男の雰囲気が明らかに変わつたのはわかつた。

「み、道に迷つたんです。気がついたら、あそこに一人で立つていて……」

「嘘だな。人間の国との間には、魔の森がある。誰かがここまで送り届けない限り、お前みたいな少女がここに来ることは叶わないはずだ」

私の首を掴む男の手に力が入る。私は恐ろしさのあまり震え、歯をガチガチと鳴らした。「本当のことを話したほうが身のためだぞ。こうもあからさまに怪しいと拷問にかけたくなる。条約によつて、領地を侵した人間は好きに処分できることになつてゐるからな」

「本当に道に迷つただけです。どうやつてここに来たのかもわからないん  
です」

「では、どこの国から来た？ フィーリアか？ それともハラルか？」

「そんな国は知りません。早く家に帰りたい……」

そう言いながら、私は涙をこぼした。ただでさえ混乱している上に、わけのわからな  
い尋問をされてはたまらない。

「身元不明か。まあ、それもよからう。今日はいい拾い物をした。ジャック、このまま  
城へ帰るぞ」

男は首のない御者にそう声をかけると、満足げな息を吐いてクッショングループに背中を預  
けた。

私はようやく解放された首を押さえて、ぜえぜえと息をする。男の言葉について考え  
ようとしたけれど、今は何も考えられなかつた。

「お前が何者であれ、我が領地に侵入したからには、相応の報いを受けてもらう」  
嗚咽を漏らすだけ返事もできない私を見て、男は声を出して笑う。

「生きたまま帰ることは諦めるんだな。久しぶりの人間の肉——楽しみだ」

そう言ってこちらに向けた顔は、車内が暗いせいでもよく見えなかつた。しかし、きつ

と口元が緩みきつた、だらしのない表情をしていたことだろう。

馬車は暗い森を走り、やがて巨大で陰気な城に到着した。

城の周りを囲む堀の前で馬車が止まるとき、城門から巨大な跳ね橋が下りてくる。鎖が  
擦れる耳障りな音が、濃い霧に包まれた森の中に響いた。

目の前の城には、鳶がびつしりと絡まつている。高い尖塔には巨大な鐘がついていて、  
馬車が到着したとたんにゴーンゴーンと鳴り始めた。何かの合図だろうか。

男は私の買い物バッグを片手に持ち、もう片方の腕で私を小脇に抱える。私は力いつ  
ぱい抵抗したが、「手足をねじ切られたいのか」という恐ろしい言葉を聞いて抵抗する  
のをやめた。

腕一本で私を抱えているのに、驚くほどしつかりした足取りで廊下を進む男。見上げ  
ると、相変わらず口元が緩んではいるが、実に涼しい顔をしていた。

男は扉の一つを勢いよく開け放ち、石造りの部屋に入つてから、私を床へ下ろした。  
そこには大きなテーブルと、巨大な水瓶が置かれている。その横には、古めかしいかま  
どが二つあるのが見えた。

「ハインリヒ。夕食の食材を調達した。すぐに仕込みをやつてくれ」

男がそう言つた直後、奥の扉が軋みながら開き、誰かがのつそりと顔を出した。

「日の入りまで、かなり時間がありますよ。まさか閣下、もう腹が空いたんですか？」  
砂を含んだようなザラザラした声が、男の言葉に応える。

声の聞こえたほうを見た瞬間、私は悲鳴をあげた。

奥の扉から出てきた人物は、まるで干からびた死体——ミイラのようだった。白いコットクコートを着たミイラが、なぜか喋つて動いている。

カラカラに乾いた皮膚は茶色く変色し、皺だらけの顔の真ん中にある鼻は、削げ落ちてしまつていて。落ちくぼんだ眼窩には、暗い影しか見えなかつた。

ハインリヒと呼ばれたミイラ男は私の悲鳴を聞いて、皺だらけの首を傾げる。

「ずいぶん活きのいい食材ですね」

「正真正銘、生きた人間だ」

「なぜこんなところに人間が？ 何かの罠では？」

ハインリヒは胡散臭そうに私を眺めている。私に言わせてもらえば、彼のほうがよほど胡散臭いというのに。

「罠でもなんでも構わん。仮に罠だとしても、不可侵の条約を破つたのは人間たちのほうだ。この少女をどう扱つたとしても、文句は言えまい」

ふむ、と頷いて、ハインリヒが私の周りをぐるりと回る。じっくりと観察しながら、ときおり驚いたように息を吐いていた。

ハインリヒの検分が一通り終わると、赤毛の男が私の襟首えりくびをむんざと掴んだ。そして、部屋の中央に鎮座している大きなテーブルの上にのせる。

そのテーブルの冷たさに、私は身を竦ませた。テーブルは巨大な石を切り出して作られており、何やら生臭いにおいと、消毒液のようなにおいがする。

恐らくこれは調理台だ。これにのせられたということは、私の運命は一つしかない……私は焦つた。なんとか誤解を解かなくては。

何か企んでここへ来たわけじゃありません！ 知らないうちに迷い込んでしまつただけなんです！」

そう叫びたかったけれど、恐ろしさで唇がこわばつてしまい、ただ震えることしかできなかつた。

「メニューはお前に任せます。だが、心臓だけは生のまま食したい」

「かしこまりました。では今から解体しますので、しばしお部屋でお待ちください」「ここで待つ」

その男の言葉に、ハインリヒが嫌そうな顔をした。

「血でお召し物が汚れます。真っ赤に染まつた上着を見たら、サリーがなんと言ふでしょ  
うねえ」

そう言われた男は、不満げな顔をしつつも黙つた。そして、しぶしぶといった様子で部屋を出ていく。しかし、閉じかけた扉の隙間からとんでもないことを言った。

「扉の外で待つてゐるぞ。断末魔だんまつまの叫びを聞きたいからな」

「俺を見くびつてもらつては困ります。ここ数百年の間、獲物に叫び声を上げさせたことなど一度だつてありませんよ」

「それでも聞きたいのだ」

男にねばられ、ハイインリヒはしばし黙つて考えていたが、やがて首を横に振つた。

「俺の美学に反します」

「……そうか、残念だ」

今度こそ扉は閉まつた。調理台にのせられた私と、ハイインリヒだけがその場に残される。ハイインリヒが用意した道具は、全部で五種類。形や長さ、刃の厚みなどがそれぞれ違う。どれを何に使うかなんて考えたくもなかつた。

「どうしてこんなところまで来たのか知らんが、とんだ災難だつたな」

「あの、私、わたしは……」

ハイインリヒは長いアイスピックのようなものを手にして私に近づく。鋭い先端がきらりと光つた。

「なんだ、話ができるのか。だが、運が悪かつたと思つて諦めな。閣下かつかは相当な美食家だ。食べることにかけちや、呆れるほどの執着を見せる。生きた人間という至高の食材を、あの方が逃がしてやるわけがない」

ハイインリヒは狙いを定めるかのように、私の額ひだに指を這わせる。

「私、自分で望んでここに来たわけじゃないんです。どうしてこんなことになつたのか、全然わからなくて……」

恐ろしさのあまり、それ以上の言葉が見つからない。私の目に涙があふれてきた。  
「あんたはどうしようもない不運に見舞われたんだよ。大丈夫、痛みはほんの一瞬だ。  
目を閉じて、あんたの神様にでも祈つてな」

アイスピックの先端が、ついに私の額に当たられた。

「悪いね、お嬢さん。その頼みは聞けない。命乞いする食材は、あんたが初めてじゃな

いんでね」

ハインリヒは氣の毒そうに言つたが、アイスピックを下ろす氣配はない。

私は必死に首を横に振る。

「いや……死にたくない！」

「目を閉じてな。そのほうがあんたのためだ」

「だって、私、なんにも悪いことしてないのに……」

それを聞いて、ハインリヒの眉間に深い皺よわが寄つた。彼は暗く落ちくぼんだ目で私をじっと見つめる。

私は涙と鼻水で顔をベタベタにしたまま彼を見つめ返した。

やがて、ハインリヒは深いため息をつき、アイスピックをそつと下ろす。

「わかつたよ、俺の負けだ。あんたに一度だけチャンスをやろう」

そう言うと、調理台の上に置いた自分の手に、アイスピックを深々と刺した。

あの様子では、きっと貫通しているに違いない。

「この手じゃあ、俺はあんたを解体できない。少なくとも明日の夜まではな。あんたはその間に、自分を食べないでくれつて閣下かくかを説得しな。上手くいくとは思えないが、やるだけやってみろ」

アイスピックを引き抜き、ハインリヒは皺だらけの口で笑つた。

「ハインリヒさん……」

「説得に失敗すれば、俺は命令どおり、あんたを解体する。そのときには、もう情けなんてかけてやらねえぞ」

血が一滴も出ていない手を庇かばいながら、ハインリヒは私にタオルを放つてよこした。

「顔拭ぬぐけ。女の子だろ」

私は夢中で顔を拭ぬぐつた。けれど、涙があふれて止まらない。

「あ、ありが、とう……」

「ふん、せいぜい頑張つてみな」

彼はコックコートのポケットからハンカチを取り出し、傷を負つた手をぐるぐると巻きつけた。そして、歯を使つて乱暴に縛る。その後出入り口の扉を開け、廊下で待つていた男に頭を下げた。

「申し訳ありません、閣下。本日は人間を解体することができなくなつてしましました」

ハンカチを巻いた手を男に見せ、ハインリヒはさらに頭を下げる。

「人間を侮あざっていました。どのような罰でも受けます」

男は何も言わずに目を細めた。ハインリヒの言葉を疑つてゐるのだろうか。

「お前以外に、人間を解体できる者はいるか？」

「解体するだけなら誰にでもできるでしょうが、小骨まじりの肉になつて、味は数段落ちますね」

男が眉間にぐつと寄せた。

「では明日まで養生しろ。明日は必ずこの人間を解体するんだ」

「かしこまりました」

「そこのお前」

男が、調理台の上で鼻をすすつていた私に声をかけてきた。私は驚きすぎて、調理台から落つこちてしまう。

「もうお前がここにいる意味はない。味が落ちないよう明日まで氷室にでも入つていろ」男は私の腕を掴んで乱暴に立たせる。彼は私が人間だとわかつてから、私の顔を見なくなつた。今は完全に食材としてしか見ていないのだろう。こんな男を説得できるだろうか。

そう思つたとき、ハイシリヒが頭を下げたままこつちを見ているのに気づいた。眼球の見えない眼窩に、心配そうな色が浮かんでいる。いや、それは私の気のせいかもしれないが、彼がくれたチャンスを無駄にはできない。

何より、このまま何もできずに終わつてしまふのは嫌だつた。まずはこの無慈悲な男に、私にも感情があるんだつてことを認識させてやる！

「放してください！」

私は掴まれていた腕を力任せに引っ張り、男の手を振りほどいた。今までされるがままだつた私が突然抵抗したので、二人は驚いたようだ。

「痛いです。そんなに強く掴まれると内出血を起こしてしまいます。もう少し丁寧に扱つてください。そうじゃないと、ストレスがたまつて肉の味が落ちますよ」自分が食材だと認めるような発言をするのは辛いが、手首の内側が内出血を起こしているのは本當だ。青くなつた私の手首を見て、男は怪訝そうな顔をした。彼としては、大して力を入れたつもりはなかつたらしい。

「お願ひですから、一人で静かに休ませてください。さつきから、もう何がなんだかさつぱりわからなくて……このままじゃ頭が破裂しそうです」

「ふむ、破裂されでは困るな。すぐに静かな場所で隔離しよう」

「氷室とかいうところもごめんです。そんなところに放り込まれたら、きっと凍え死んでしまいます」

「そういえば、人間というのは繊細な生き物だったな」

男は呆れたように息を吐いたが、ため息をつきたいのは私のほうだ。

「死なれたら鮮度が落ちる。お前の気が休まる部屋を用意しよう」

の首にしがみついた。

ほの暗い廊下には、たくさんの薔薇ばらが飾られている。恐ろしげな雰囲気の古城に真紅しんくの薔薇とは、いささかハマりすぎている。

もしかすると、この男の趣味なのかもしれない。赤い髪をした美麗な男には、確かに赤い薔薇がよく似合う。

そう思つて彼の横顔を眺めていると、その口元がみるみるうちにダラリと緩んだ。さつきはハインリヒがいたから、辛うじて口元を引き締めていたのだろう。

「肉づきは申し分ないな」

どうやら私は食材として、男の合格ラインをクリアしたらしい。彼の脳内で一体どんな料理にされているのかはわからないが、人の体をジロジロと眺め回すのはやめてもらいたかった。

「この部屋なら文句はあるまい」

連れてこられたのは、古いけれどかなり広い部屋だつた。掃除は行き届いているよう

で、埃ほりっぽさや湿っぽさは感じられない。

臙脂色えんじをした猫足のソファーや、古めかしいけれどよく磨かれたサイドテーブルが、燭台しょくだいの炎に照らされている。奥には大きなベッドがあり、リネンもしっかりと整えられていた。

「来賓用らいひんの客室だ。ここならば明日まで不自由なく過ごせるだろう」

「ありがとうございます。こんなに素敵なお部屋を用意してもらえるとは思いませんでした」

素直にお礼を述べたのに、なぜか男が眉をひそめた。気難しい男だ。

「何か用があれば、この紐を引くといい。誰かが用件を聞きに来るだろう。そろそろ城内の者たちが起きだすころだから、わからないことは彼らに聞きなさい」

「これから起きるんですか?」

窓の外を見ると、どんよりした雲の切れ目からピンク色の夕焼けが覗いていた。風もないのに雲がどんどん晴れていくのが、とても不思議だった。

「日の光を浴びれば体が爛なんだれてしまう。だから力が弱い者は、日が完全に沈むまで寝床

から出ない」

「あなたは平気なんですか？」

私は思わず尋ねる。彼はまだ日の高いうちから外を歩いていたのだ。

「くだらない質問だな」

男は笑いながら、口元をそつと拭つた。どうやらまた涎<sup>よだれ</sup>が垂れていたらしい。背筋が凍るほどの美貌なのに、口元が緩<sup>ゆる</sup>すぎる。なんだかとても残念な人だ。

彼に対する恐怖が薄れ始めたとき、私の視界がぐるりと一回転した。

一体何が起きたのだろう。

まず感じたのは、背中の鈍い痛み。それから、鼻先で吐き出される冷たい息。

——床に押し倒され、組み敷かれている。そう理解した瞬間、私の体は震えだした。押さえつけられている両手には男の体重が乗り、びくとも動かせない。

「ああ、腹が空<sup>す</sup>きすぎてもう限界だ。いつそ生のまま食べてまおうか……」

男はそう言つて唇をひと舐めした。やめて、と首を振つて訴えている私のことなど完全に無視している。

「そ、そんなに私を食べたいんですねか？」

「ああ。頭がおかしくなりそうなほど」

男の瞳が一回り大きくなつた気がして、私は背筋がぞくりとした。

「……どうして？」

「お前はずいぶん物知らずだな。よく今まで無事に生きていられたものだ。いや、無知だからこそアンデッドの領地に、こうしてのこのこやつてこれたのか？」

「アンデッドの、領地？」

私は耳を疑つた。この男は一体何を言いだすのだろう。

「ここはアンデッドだけが住まう辺境の地、エルドレア。私はこの地を治めるアルバード・リード・エルドレア辺境伯だ。まさかアンデッドも知らぬというわけではあるまい？」私は首を横に振つた。アンデッドというのはゾンビや吸血鬼といった、物語に出てくる不死の怪物のことだ。

さつきからわけのわからぬことばかり起きているけれど、彼の説明を聞いて、ようやくほんの少し謎が解けた。

ここは、私がいた世界ではないのだ。

異世界トリップ——そんなことが現実に起こりうるとは思えない。しかし、現に私は日本とは似ても似つかない場所にいる。

そして、男は自分を領主だと名乗つた。もし失礼なことを言えば、本当にこの場で食

べられてしまうかもしれない。

私は慎重に言葉を選びながら口を開いた。

「あなたもアンデッドなんですか？」

男——辺境伯は口の端を吊り上げた。その笑みは、私の問いを肯定している。

「先ほど、私を料理するのは明日まで待つてくれるとおっしゃつてましたけど……」

「ああ。だが、かなり後悔している。お前の肉は柔らかそうだから、生で食してもさぞ美味だろうな」

彼はそう言って、私の手首をそっと持ち上げる。

「腕の一本くらいなら構わないだろ？」

「絶対に駄目です！ あ、あなたは、ご自分で決めたことをそやつてすぐに覆すんですか？」

その言葉を聞いて、辺境伯が不機嫌そうに眉を寄せた。私は思わず震えてしまう。

震えては駄目だ。もつと落ち着いて話をしなくちや。

私は勇気を振り絞つて、辺境伯の目をまつすぐに見た。

「人間を食べたって、美味しいとは思えません。——私が、もつと美味しい料理を作つてみせますよ。人間の肉なんかよりも、もつと珍しくて美味しい料理を」

「ほう？ どんな料理だ？」

辺境伯の瞳に、好奇の光が浮かんだ。

「私の故郷の料理です。きっと召し上がったことのないような味だと思います。材料と調理場を貸してください。それと私が持っていたバッグを返してもらえば、今からでもお作りします」

辺境伯は黙つて考え込んでいる。私の申し出に興味を持つたようだ。

「なんだと？」

辺境伯が目を見開いた。その剣幕に一瞬怯んでしまったが、萎縮しそうになる自分を必死に鼓舞する。

「私はあなたに食べられたくありません。だから、代わりに私が作った料理を食べてください。そして美味しいと思ってくださいたのなら、その日は私を食べるのを我慢してほしいんですけど……」

辺境伯は驚いた顔で固まっていたが、やがて異様に鋭い歯を見せてニヤリと笑う。

辺境伯が体を起こした。息苦しいほどの圧迫感がなくなり、私はひとまず安堵の息を吐く。

「だが……」

辺境伯の手が、ゆっくりと私の喉元にかかる。

「口に合わなかつたら、その場でお前の命をもらう」

「は、はい……」

彼の手の冷たさに怯えながらも、私はどうにか声を絞り出した。

「結局、調理場にとんぼ返りだな」

立ち上がった辺境伯が、おかしそうに笑つた。私には笑う余裕なんてなかつたけれど、自然と口元が引きつり笑つたようになつてしまふ。

——もう後戻りはできない。

食べることは昔から大好きだった。食べることだけではなく、料理をすることにも興味を持つたのは、母方の祖母の影響だ。

祖母は私が住んでいた町から電車で数駅のところに、小料理屋を開いていた。家庭料理とは一味違う、プロの味。それを小さいころからたびたび食べていただけれど、自然と味はまだまだ遠く……

私は週末ごとに電車に乗つて祖母の店に通い、助言を求めた。

「ねえ、おばあちゃん。レシピ本のとおりに煮物を作つてんだけどね、どうしてもおばあちゃんが作つてくれたような味にならないんだ。何が足りないのかな？」

祖母は笑つて言つた。

「結は、どのくらい時間をかけてお料理するの？」

「うーん、大体一つの料理に十五分くらいかかるかな」

「もつとゆっくり作りなさい。ゆっくりと言つても、だらだら作るんじゃないのよ。時間かけて丁寧に作るの。お出汁だしを取るときなんかもそう。市販の顆粒出汁かりゅうも悪くないけど、昆布こんぶとかつお節で取つたお出汁を使うと、味が全然違うのよ。おばあちゃんはお客様さんに喜んでもらえるのが嬉しいから、その顔を思い浮かべながらゆっくり面取りをしたり、隠し包丁を入れたりするの」

私は驚いた。「手早く」「簡単に」「時間短縮」——それがよかれと思い、そのころの

私はそういう料理本を好んで買っていたからだ。

その話を聞いて以来、私はできるだけ丁寧に料理を作るようになつた。テスト前や用事がある日以外は、下処理や下味をつけるのになるべく時間をかけている。

今では祖母からもそれなりの評価をもらい、家族や友人たちからも好評なので、そこそこの腕前になつていいと思う。それでも私は不安だった。この見るからに美食家っぽい男を納得させられるかどうか……。味覚が私たちと一緒に限らない。はつきり言つて不安要素しかないけれど、もう後戻りはできない。まずは今日一日を生き延びる。そして帰る方法を探すのだ。

「なんだ、結局戻ってきたのか？」

調理場に戻ってきた私たちを見て、ハインリヒは呆れたようにため息をついた。彼は丸くて黄緑色をした何かの皮を、手際よくむいている。夕食の仕込みをしているのだろうか。

「実は、これから閣下を説得するための料理を作ることになりました」

私の言葉を聞いて、ハインリヒは作業の手を止め、驚いた様子を見せた。

そんな彼に構わず、私は部屋の隅に転がっていた買い物バッグの中身を確認する。

よかつた。中身は無事だった。これがあれば、なんとか料理を作ることができる。

しかし、問題が一つ。ここにはガスコンロも水道もない。

私は辺境伯を振り返った。

「あの、一つお願いがあります。ハインリヒさんに、お手伝いをお願いしたいんです」

「なぜだ？」

怪訝な顔をする辺境伯に、私は理由を説明した。

「この調理場は、私の故郷のものとはだいぶ勝手が違います。慣れない環境では上手く料理が作れません。だから、使い方を教えてもらいたいんです」

辺境伯は面倒くさそうに、私は期待を込めてハインリヒを見る。

二人分の視線を集め乾燥人間は、肩を竦めて頷いた。それを見て、私は胸を撫で下ろす。

「ありがとうございます。では、さっそく準備に取りかかります」

辺境伯は鬱陶しそうに手を払い、近くにある椅子を引きずつて調理場の隅に座つた。

まさか料理ができるまでの間、ここにいるつもりなのだろうか？

「閣下。ずっとここで見ておつもりなのですか？」

ハインリヒが私のほうをチラリと見てから、気持ちを代弁してくれた。

「もちろんだ。何か不都合でもあるのか？」

大ありだ。彼がいるとプレッシャーが半端ないし、手元だって狂いかねない。「この娘が緊張してしまいます。まともなものを作らせたかったら、自室でお待ちください」

「ハインリヒ、お前はいつも私を邪魔者呼ばわりするんだな」「失礼を承知で申し上げますが、できあがつたそばから料理をつまみ食いされでは、俺が邪魔に思うのも仕方がないでしょう」

ハインリヒは口をへの字に曲げて腕組みをした。身に覚えがあるらしい辺境伯は、しぶしぶといった様子で立ち上がる。

「わかつたわかった。ここは潔く退散しよう。娘、お前は確かユイといつたな。——期待しているぞ」

それは、私が失敗するほうに期待しているという意味だろう。その証拠に、彼は私の体を舐めるように見回している。私は思わず身震いした。

2

「それで、あんたは何を作りたいんだ?」

辺境伯の靴音が完全に遠ざかっただのを見計らい、ハインリヒは力サカサした手で私の肩を優しく叩いた。彼は見かけによらずいい人だ。

涙が出てきてしまい、私は目元を擦つてから話し始める。

「作りたいものの候補はいくつかあるんですけど、まずはそれらの料理がここでも同じようを作れるのかどうかを知りたいんです」

「どういうと?」

「私が使いたい食材が、ここにあるとは限らないんです。例えば、ほうれん草とかにんにくとか、できればジャガイモも——」

ハインリヒは腕組みをして眉を寄せる。

「俺は四百年間コックとして働いているが、そんな食材は聞いたことがない」

まるで誰かに聞かれるのを恐れているみたいに、彼は低い声で呟いた。

「あんた、一体どこからやつてきたんだ?」

落ちくぼんだ目で、私を探るように見つめている。きっと警戒されているのだろう。彼はいい人だから、本当のことをするべて話してしまおうか。でも、話したところで信じてもらえるだろうか。私は迷いながらも口を開く。

「あの、私、本当は……」

「いや、やっぱり言わんでいい。余計なことは知らないほうが身のためだ」

「それより、さつきのあんたの話じやあ、何が必要なのか俺にはさっぱりわからん。だから、あんたが自分の目で見て選んだほうがいいだろう」

そう言うと、ハインリヒは出入り口の扉へ向かう。

「ついてきな。氷室へ連れていくてやる」

手招きされた私は、大人しく彼のあとに続いた。

目的的部屋は、調理場のすぐ隣にあった。よく見ると、扉に細かな霜がついている。その扉を開くと、中から痛いほど冷たい空気が流れ出てきた。まるで真冬の雪山に来たみたいだ。

もしかすると、ここは危うく私が放り込まれそうになつた部屋だろうか? ……あの

とき必死に拒否して本当によかつた。  
 「使えそうなものがあれば、なんでも持つてつていいでぞ」「ありがとうございます。でも……」  
 私は天井近くまである、背の高い棚を見上げた。木箱が隙間なくぎっしりと詰まっている。

とりあえず手近にある箱を覗き込んでみたものの、私は途方に暮れてしまった。

白い毛がびっしりと生えた、細長い何かがたくさん入っている。これが野菜なのか、はたまた動物なのか、私にはさっぱりわからない。

「それはムーサといって、茹<sup>ゆ</sup>で皮をむいて食べるんだ。甘くて美味<sup>うま</sup>いぞ。よくデザートに使われるな」

デザートに使われるということは、果物なのかもしれない。しかし、見た目は白いサルの尻尾みたいで、とても美味しそうには見えない。

こここの食材を使って料理<sup>料理</sup>をするのは、思つていたよりも難しそうだ。無意識に吐き出しだため息は、白く染まつて瞬<sup>またた</sup>く間に霧散<sup>むさん</sup>した。

「ひとまず、脂身<sup>あぶらみ</sup>の少ないさっぱりした肉が欲しいです。ここでは主になんの肉を使つているんですか?」

ハイインリヒは「そうだなあ」と頸<sup>あ</sup>に手をやつてから、ごそごそと棚を漁<sup>あさ</sup>った。

「今ここにあるのは、牛、豚、羊。ああ、鳥肉も数種類あるな」

そう言いながらハイインリヒが取り出したのは、アヒルくらいの大きさの鳥だった。その鳥には首がついておらず、羽もすべてむしられている。それなのに、足だけはしつかりとついていた。

スーパーで切り身を買うことに慣れている私は震え上がった。深呼吸して気持ちを落ち着かせてから、首なし鳥を指差す。

「じゃあ、その鳥肉を使わせてください。それから、肉料理のつけ合わせに向いている野菜も欲しいです」

「そういう野菜ならこっちにある」

そう言つて、ハイインリヒは氷室<sup>ひむろ</sup>の奥にある扉を開き、中へ消えていく。私も彼のあとに続いた。

その部屋はさつきの部屋と同様に薄暗いものの、温度が違っていた。さつきの部屋が冷凍室なら、こちらは冷蔵室といつたところか。

「野菜や果物の中には、凍らせるべく味や食感が落ちるものもあるだろう。そういうデリケートな食材はこっちの部屋で保存してるんだ」

ハイインリヒは食材の箱を開けては、目を細めて中身を検分している。まるで野菜ソムリエみたいだ。

「大体こんなもんか。ちょっと試しにかじつてみな」

「えつ、大丈夫ですか？」

「自分で食つてみるのが一番早い。かじつたところは切り落とせば使える。……ああ、でも人間の歯型がついていたほうが、閣下<sup>かっか</sup>は喜びそうだな」

「いえ、そうじやなくて。私が食べても平気なんでしょうか？ 例えば毒があるとか、人間の体に合わないとか……」

「ここは私の知らない世界だ。何が起こるかわからない。」

「ああ、その可能性もあるか。じゃあエルドレアで採れたものは駄目だな。人間の国から取り寄せたものだけを使うことにしよう」

「人間の国……」

私はため息をこぼして自分の運の悪さを嘆く。

こんなわけのわからないところじやなく、そつちにたどり着けばよかつたのに。そうしたら、食べられる心配なんて全然なかつたのに……。しかし、今そんなことを考えてても空<sup>むな</sup>しいだけだ。私はハイインリヒが選んでくれた野菜

や香料を少しづつ口に入れてみる。

食べたことのない風味のものもいくつかあつたが、私の知る食材に驚くほど近い味のものもたくさんあつた。これなら、なんとかいけそうな気がする。

「人間の国と貿易できるということは、お互いの関係は意外と良好なんですね」

これだけたくさんの中食を輸入しているのだから、お互いの国への行き来もスマーズに行われているに違いない。もしそうなら、私もいつか人間の国に行けるかもしれない。

しかし、ハインリヒは私の希望をあつさりと打ち碎いた。

「いいや、昔から小競り合いをくり返している。まあ、今は停戦中だけだ。これらは閣下の個人的な伝手を使って輸入してるんだよ。いわば闇ルートつてところだ」

「……そうなんですか」

私は肩を落とす。どこまでもツイていない。

「なんだ？ 人間の国に興味があるのか？」

ハインリヒが眉間に皺を寄せた。そうすると、ますます凶悪な面構えになる。

「闇ルートとはいえ、さすがに人間となると簡単には入手できない。だから、人間の国に逃げようとしても無駄だぞ。貴重な食材であるあなたを、閣下がみすみす逃がすと思うか？」

「思いません。彼は完全に私を食べる氣でいるみたいですから」  
ハインリヒにアイスピックを突きつけられたときの恐怖を思い出し、私は慌てて頭を振つた。

やがて食材選びを終えた私たちは、冷凍室へ戻つてきた。

「冷蔵部屋に出入りするときは、扉が完全に閉まつたかどうか必ず確認してくれ。少しでも開いていたら、氷室の冷気で中の食材が凍りついちゃうからな」

扉がきちんと閉まつているかを慎重に確認してから、ハインリヒは真剣な口調で言つた。

その後、私たちは選んだ食材を抱えて廊下に出た。暖かな空気に触れると、こわばつていた肌が緩む気がする。

「頑張れよ。これからが正念場なんだろ」

少なくともハインリヒだけは私を応援してくれる。私は力強く頷いて調理場へと向かつた。

言いきれない。だから実験をしてみることにした。

巨大的な水瓶の中には、澄んだ水がなみなみと入っていた。それを柄杓<sup>ひしゃく</sup>ですくって手の甲に数滴落とす。

「それは、この城の井戸から汲<sup>く</sup>み上げた水なんだ」

ハインリヒがそう言いながら、私の手元を心配そうに覗き込む。

しばらく待つてみたけれど、何も起こらない。手が白い煙を上げて溶けることも、皮がめくれてピリピリと痛むこともなかつた。

私は柄杓の中の水をほんの少しだけ口に含んだ。拍子抜けするほどなんの味もしない。いや、むしろ冷たくて美味しかつた。

そういえば、ここに来てから何も口にしていない。急に喉の渴<sup>かわ</sup>きを覚えた私は、今度はもっと大胆に飲んでみる。本当に美味しい。生き返るようだ。

「どうやら大丈夫そうですね」

この城にどのくらい滞在することになるのかわからないが、水も飲めない生活なんて耐えられないので、私は心から安堵した。

「よし。それじゃあ始めましょう」

まずはお湯を沸かそうと思い、鍋に水を入れてかまどの上に置いた。

次は火を起こさなければいけないのだが、どうやつて火をつければいいのだろう。かまどの中を覗くと真っ黒い炭が入つていて、その周りに白い灰が山のように溜まつていた。

「まずは灰をかき出すんだ。これを使いな」

ハインリヒがそう言つて、先端にヘラがついた長い棒を手渡してくる。私はそれをかまどの中に突っ込んで、灰をかき出した。

そしてハインリヒに用意してもらった大きなたらいに灰を落とし、かまどに炭を補充する。これでかまどの準備が完成した。

そしてハインリヒに用意してもらつた大きなたらいに灰を落とし、かまどに炭を補充と壺を持って歩いてきた。壺の中には何かの液体が入つているらしい。

「ファイヤードレイクの唾液だ。これを棒の先につけて石で擦<sup>こす</sup>ると発火する」

ハインリヒは教師のように説明してから、目の前で実演してくれた。マッチみたいなものかと思つてのんびり見学していた私は、予想以上に大きな炎が上がつたことに驚き、慌てて後ろに下がる。

「あの、ファイヤードレイクってなんですか？」

「火を噴く大きなトカゲだ。この唾液の取り扱いには気をつけろよ。たったこれだけの量で、この調理場が吹き飛ぶくらいの火力が出る」

まさか、この世界にそんなに危険なモンスターまでいるとは思わなかつた。とはいへ、幸いエルドレアには生息していないらしいので、ばつたり出会うことはなさそうだ。

私はかまどに火をつけ、お湯が沸くまでの間に、ハインリヒに選んでもらつた野菜を洗い場で洗うことにする。

今回彼に選んでもらつたのは、ジャガイモとほうれん草に似た野菜だ。メインの鳥肉料理のつけ合わせに、マッシュポテトを作ろうと思っている。茹でて刻んだほうれん草を混ぜると、濃い緑色がアクセントになつて、見た目が綺麗に仕上がるのだ。

ちなみに、ジャガイモに似た野菜はタルモという名前だそうだ。茹でると柔らかくなり、つぶすことができるらしい。

一方、ほうれん草に似た野菜の名前はわからない。氷室で濃い緑色の葉野菜が欲しいと言つたら、ハインリヒはそこらへんにある野菜を放つてよこした。そんなに適当に選んで大丈夫なのかと尋ねたら、絶対にこれを選ぶべきだと強く言われた。念のため生のまま味見をしてみたら、癖がなくてほんのりと甘みのある野菜だつた。

まずはタルモを小さなさいの目切りにして、水にさらす。なんのためにするのかとハ

インリヒに聞かれたので、変色を防ぐためだと答えたたら、妙な顔をされた。どうやらタルモはジャガイモと違つて、空氣に触れても変色しないらしい。

水切りしたタルモを沸騰している鍋に入れて茹でる。緑色の野菜も丁寧に洗つて同じ鍋に入れ、さつと湯がいただけで取り出した。茹でると緑色がより鮮やかになるのは、ほうれん草と同じだ。それをみじん切りにして、皿の上で粗熱あらねつを取る。

今度は茹で上がつたタルモをボウルに入れてつぶす。ポテトマッシュヤーがないので、大きめのフォークでガンガンつぶしていく。

細かくつぶしてから、舌触りが滑らかになるように裏ごしした。そこに牛乳を少しづつ加えて混ぜる。本当は生クリームが欲しかつたが、ここにはないそうなので諦めた。マッシュポテトにほうれん草もどきを入れて混ぜたあと、塩とコショウを使って味つけする。そこまでできたところで、日本から持つてきた買い物バッグに手を突つ込んだ。これこれ、ガーリックパウダー！ にんにくの香りをほのかにきかせたいときに重宝している。すり下ろしたにんにくとおいが強すぎるが、これだと手軽だし香りにも嫌味がない。

「どうした？ 大丈夫か？」

しゃがみ込んだまま動かない私に気づき、ハインリヒが心配そうに声をかけてきた。

「次の料理、作れないかもしないです……」

私は調理台の下に置かれていたザルを指差した。そこには、例の首なし鳥が入っていた。

「これがどうした？」

「さばけません」

よく考えてみれば、原形を残した状態の鳥肉をさばいたことなんてない。普段何気なく食べている肉が、元は生きている動物だということを思い知らされ、気分が悪くなりそうだ。

「じゃあ、あんたは普段どうやって肉を食つてたんだ？」

首を傾げるハインリヒの言葉に、私はショックを受けた。

スーパーに行くと、切り身の肉がパックに詰めて売られている。誰かが私の代わりに生き物を殺して切り分けてくれたものだ。そんな当たり前のことも忘れて、私は気軽に肉を買っていた。

ハインリヒは私と目線を合わせるようにしゃがみ、気遣わしげに言った。

「無理することはない。俺がこいつをさばいてやるうか？」

「お願ひします！」

私はその申し出に飛びついた。彼は領くと、鳥をザルごと調理台の上にのせる。

「血は抜いてあるからそれほどグロテスクじゃないと思うが、あんたは見ないほうが多いかもしれないな」

そう言われて、私は思わず目を伏せた。肉が包丁で骨ごと断ち切られる音がする。

料理を辺境伯に気に入つてもらえなければ、この調理台の上で次に切り刻まれるのは私だ。そう思うと、骨を削るようなゴリゴリという音が一層恐ろしく聞こえた。

「どこの部分を使うんだ？」

「あ、胸肉をください」

「はいよ」

私の手の上に、さばきたての鳥胸肉がのせられた。スーパーで見かけるなじみの形になつていて、もう生きていたときの姿なんて想像もできない。

……私もいざれこうなるのかな。

鳥肉をまな板の上に置き、包丁を握つても、不安が収まらなかつた。肉を包丁で切る感触がいつになく生々しくて、手が震えてくる。

今まで悪いことなんか一度もしたことがないと思っていた。でも、本当はそうではなかつたのだ。生き物を殺して食べるには生きるためなら仕方がないことだと思うけれど、失われた命に感謝しないのは立派な罪。それに気づいたことが、一番ショックだった。

「おいおい、切れてるぞ」

ハインリヒの声に、ハツとして手元を見る。すると、なぜか鳥肉が真っ赤に染まっていた。いつの間にか包丁で手を切ってしまっていたらしい。

「だいぶ動搖してるな。まあ、無理もないか」

ハインリヒが呆れたように言う。そして私の手を取り、血を水で洗い流してくれた。

彼はどこからか清潔そうな布を取り出し、私の手に巻きつける。真っ白い布の一部が、みるみる赤く染まつた。

「悪いが、これ以上は手伝えない。俺も俺で閣下にお出しする料理を作らなくちゃならないからな。だから、あとは自分一人で頑張るんだ」

ハインリヒはそう言って、洗い場から調理台のほうへ戻っていく。そして黄緑色をしたソフトボール大の野菜の皮むきを始めた。彼の足元には、その野菜が段ボール一箱分くらい置かれている。

「ありがとうございます。私、やれるだけやってみます」

ハインリヒはちらりと私を見てから、口をへの字にして照れくさそうに頷いた。

私は気を取り直して、買い物バッグの中から大きなボトルを取り出す。

みんな大好き、お醤油(しょうゆ)である。これこそ日本人の味覚の原点。お袋の味だ。

メインの料理は、鳥の照り焼きにしようと思っている。

深めの皿に醤油を注ぎ、そこに砂糖を大さじ二杯くらいと酒を少し加えてよく混ぜる。本当は日本酒がいいんだけど、ここにはそれがない。その代わりワインなら赤白両方あるそうなので、白を選んで使ってみた。たったこれだけで照り焼きのソースの完成だ。味が染みやすいよう、フォークで穴を開けた鳥肉をソースに浸し、しばらくしてからひっくり返す。充分に下味がついたところで、私はかまどの前に立つた。

あとはフライパンで焼いて、ソースを絡めれば完成なのだが、轟々と燃えている炎の勢いに気圧されてしまう。

これ、どうやって火加減を調節するんだろう。中火とか弱火とかにできるのかな?

とりあえずフライパンに油をひき、鳥肉を並べてみる。まず皮目から焼くのがコツだ。中で真っ赤な炎が燃えているかまどに、恐る恐るフライパンをのせてみる。すると、ジユウという音と共に、肉の焼ける香ばしいにおいが立ちのぼった。思ったよりも火力が強い。

## 立ち読みサンプル はここまで